

游美

Yubi
No. 41



くまがいもりかず
明治、大正、昭和と長い画歴をもつ熊谷守一(1880-1977)の95歳の時の作品ですが、ほとんど4号の板を用いた熊谷としては、珍しく8号大で描いています。この絵の2年前、作者は、次のような言葉を残しています。

「若いとき入谷の太郎稲荷の榎の木と池の風景を1と月かかって8号に描いたことがあります、それが1番長くかかった画です」

彼が入谷にいたのは、東京美術学校に通っていた22～23歳頃のこと、90を越え、遠い昔の記憶、青春の思い出がよみがえり、なつかしい風景をもう一度描いてみたくなったのでしょうか。大きくとらえた榎の木の、深く濃い緑の色の塊りは、子どもの描く絵のように、純粹で、大らかで、あたかも青春のかおりを放っているかのように思えます。

(主任学芸員 小泉淳一)

茨城県近代美術館

へたも絵のうち 展覧会 熊谷守一ものがたり

2002年7月13日[土]～9月1日[日]

熊谷守一『太郎稲荷』

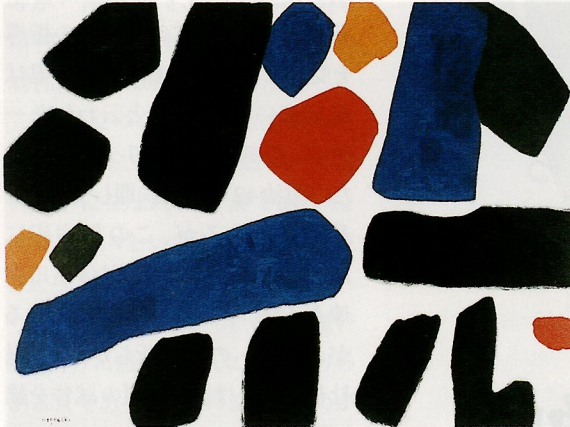
昭和50年(1975)/油彩/板
38.0×45.5cm/熊谷守一美術館蔵

Contents

- 1 熊谷守一ものがたり展
- 2・3 [企画展紹介]
ドイツ表現主義の芸術展
日本画40年展
滝平二郎きりえの世界展
- 4 探訪/十河雅典先生を訪ねて
- 5 茨城の画人たち/二世五姓田芳柳
- 6 美に遊ぶ
春の美術鑑賞旅行
- 7 所蔵品の紹介
- 8 わが街のモニュメント
あとがき

游美

Yubi
No. 42



村井正誠 『たくましき人々』

1988年 / 油彩・カンヴァス
194.3×259.2cm / 広島市現代美術館蔵



須田 寿 『門』

1982年 / 油彩・カンヴァス
91.0×116.7cm / 世田谷美術館蔵

茨城県が生んだ近代洋画家、中村 彝^{つね} (1887~1924) の画業を永く記念することを目的とした「中村 彝賞」は、その精神に相応しい高邁な制作活動に精進する洋画家に贈られる賞であり、当館ではその受賞作家を順次紹介してきました。

今展では、第6回目の受賞者村井正誠 (1905~1999) と、第7回目の受賞者須田寿 (1906生) の二人の洋画家を紹介致します。村井は、日本における抽象絵画の先駆けとして大きな功績を残し、他方、立軌会^{りゅうきかい}創立時からの主軸として活躍してきた須田は、96歳を越えた今なお意欲的に発表を続けています。

独自の画風により、ともに戦後日本の洋画壇をリードし続けた二人の世界を併せてご覧いただけるのも、この展覧会の魅力の一つといえるでしょう。

(係長 谷津喜美代)

茨城県近代美術館

中村彝^{つね}賞記念

村井正誠^{まさ なり}・須田寿^{ひさし}展

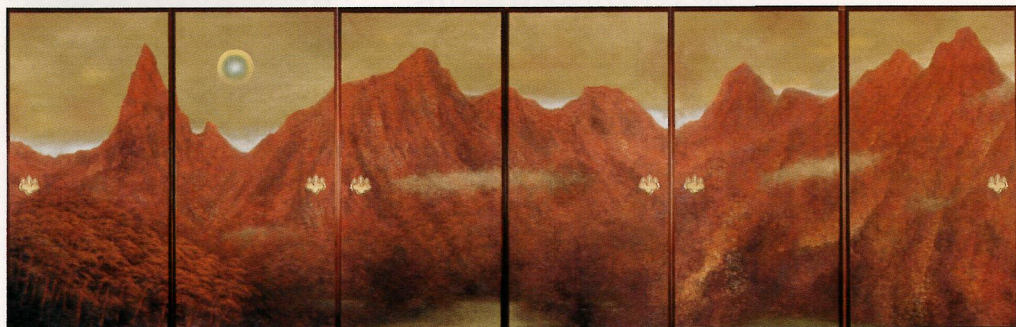
2002年11月30日[土]~2003年1月19日[日]

Contents

- 1 中村 彝賞記念
「村井正誠・須田 寿」展
- 2・3 父 雨宮治郎を語る
- 4 探訪 / 倉島重友先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 茨城の画人たち / 飛田周山
- 7 [常設展・企画展紹介]
小堀 進展
堂本印象展
- 8 わが街のモニュメント
あとがき

游美

Yubi
No. 43



平成6年、82歳の奥田元宋は、京都・銀閣寺の庫裏大玄関と改築される弄清亭の障壁画制作にとりかかる。完成まで2年以上を費した大事業は、元宋芸術の総決算といえるものであった。

「私はよく山に行くが、都会から四辺山に囲まれた山中に入ると、自然の懐に抱かれた様な或種の安堵感を覚えるのである。それは山の霊氣に心を洗われるからであろう」と、『山霊重畳』制作の動機を述べている。各地の山々を歩き写生を繰り返してきた元宋の心象が、「元宋の赤」と呼ばれる赤を基調としたこの風景に結実している。半世紀もの間、風景画一筋に歩んできた元宋の自然観や風景観は、作者自ら心の拠り所となる山々を創出させたのである。

(副主任学芸員 中田智則)

奥田元宋『山霊重畳』

1996年 / 175.0×1076.0cm

慈照寺(銀閣寺)蔵

Contents

- 1 奥田元宋 卒寿記念展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4・5 企画展紹介
美に遊ぶ
- 6 探訪 / 寺本輝正先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち / 清原 斉
- 8 わが街のモニュメント
版画実技講座
あとがき

茨城県近代美術館

奥田元宋 卒寿記念展

2003年2月22日[土]～3月30日[日]

游美

Yubi
No. 44



山口華楊『^{げん}げ』

昭和54(1979)年／紙本彩色・額装
156.0×171.0cm／損保ジャパン東郷青児美術館蔵

2匹の狐は今にも飛び出してきそうな実在感がありますが、それは、毛の柔らかさ、踊るような一瞬の動きなど、鋭い観察と写生によって狐の特徴を描いているからにほかなりません。しかし、それだけに留まるものではありません。画面左下に大きく空間を残し、それを中心に円を描くかのように狐を配する構図をはじめ、その動きやしっぽの向きが生み出す躍動感、背景の中で浮遊するかのよう狐が漂わず抒情性などに起因しているといえます。

日本画は、油彩画に比べ、その材質・技法の性格上、描かれる対象を本物らしく見せることは難しいとされていますが、山口華楊は、空間のもつ緊張感や詩情によって狐を生きているかのように描くことに成功したのです。
(副主任学芸員 中田智則)

茨城県近代美術館 開館15周年記念シリーズ2

日本画に描かれた動物たち展 —明治から今日まで—

2003年6月14日[土]～7月27日[日]

Contents

- 1 日本画に描かれた動物たち展
- 2・3 私と美術／加藤貞雄館長
美に遊ぶ
春の美術鑑賞旅行
- 4・5 企画展紹介
- 6 探訪／栗田政裕先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち／小川芋銭
- 8 わが街のモニュメント
事務局異動
あとがき



石井鶴三『一夕の恋(六)』

昭和13(1938)年／墨・紙／22.3×33.3cm／茨城県近代美術館蔵

石井鶴三(1887-1973)は、院展の彫刻家であると同時に、油彩、水彩、水墨、版画、素描そして挿絵の制作と非常に幅広く活躍し、昭和25年に日本芸術院会員となりました。

特に吉川英治原作「宮本武蔵」の挿絵(昭和13年1月～14年7月朝日新聞連載)においてその評価を高めたのです。それまでの物語に従属するという挿絵のイメージから脱却し、挿絵だけでも見応えのあるものになりました。

上の挿絵は、武蔵が剣とは何かと自問自答し、剣を道として、深く、高く、突き極めようと決意した場面です。剣の求道者として人間武蔵を描いた吉川英治の原作に負けないうくらい簡潔でシャープな線と墨の持つ情感により、作中の場面と人物の心理とを見事に描いています。(首席学芸主事 堀江俊夫)

茨城県近代美術館

描かれた武蔵展

—石井鶴三 挿絵の世界—

2003年12月2日[火]～2004年1月25日[日]

Contents

- 1 描かれた武蔵展
- 2・3 父 那波多目焯星を語る
- 4 私と美術／加藤貞雄館長
- 5 探訪／室伏 勇先生を訪ねて
- 6 美に遊ぶ
写真講座
- 7 茨城の画人たち／中村彝
- 8 企画展紹介
あとがき

游美

Y u b i
No. 46



高山辰雄の風景画には、よく「道」が登場します。高山は道について、「人の気配が漂い、遠い昔からの人

の足跡、そこを通った多くの人々の姿が目には浮かぶ」と語っており、このような思いの顯れか、高山の描く道からは、人々の営みや歴史が強く感じられます。

この作品は、高山の郷里大分県の由布院に取材したものです。ここでは、道は画面下から上へとゆるやかな弧をえがいて続いており、行き交う人々が点々と配されています。道をはさんで左手には川と民家、また民家へ至る小さな橋が、右手には手押しポンプが描かれています。このポンプは、画家が描き加えた実在しないものですが、翌年この場所を訪ねたところ、水が湧いていたので高山は大変に驚いたそうです。

画家の郷里への思いに溢れた作品です。 (主任学芸員 山口和子)

茨城県近代美術館

高山辰雄展

2004年1月31日[土]～3月28日[日]

高山辰雄 『由布の里道』

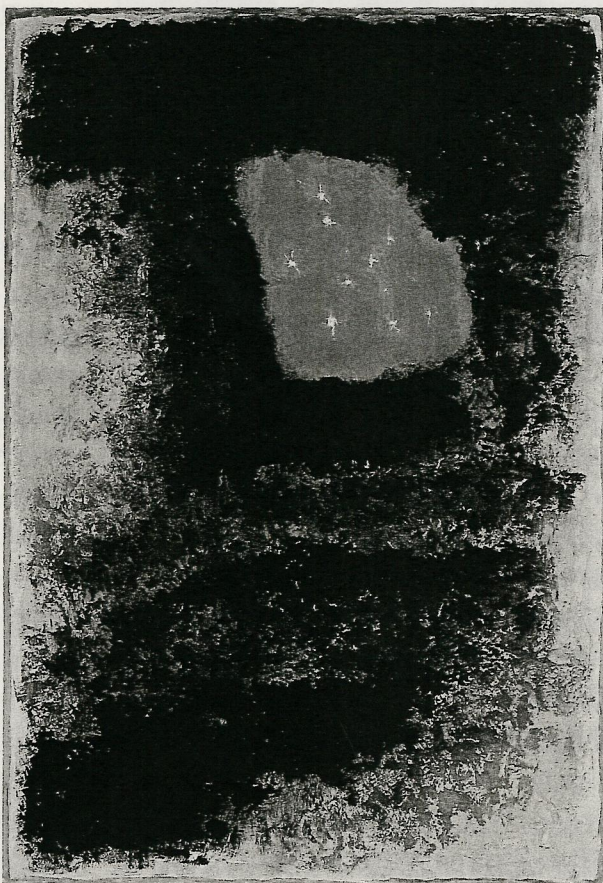
平成10(1998)年/紙本・彩色
216.0×146.0cm
第30回改組日展
大分県立美術館蔵

Contents

- 1 高山辰雄展
- 2 私と美術/加藤貞雄館長
- 3 探訪/小鹿尚久先生を訪ねて
- 4・5 美術鑑賞旅行
- 6 茨城の画人たち/木村武山
- 7 企画展紹介
- 8 企画展紹介
版画実技講座
あとがき

游美

Yubi
No. 47



暗い背景の中に、ポツカリ開いた窓からのぞく青空のような形が浮び上がっています。作者の言葉によると、戦争で召集され、満州（中国東北部）ハイラルに配属され、匍匐訓練を

していたとき、自由に目の前を歩きまわるアリを見て、アリになって穴の底から空を眺めていたい気持ちになったと言います。深い穴から見上げると、昼間でも空には星が輝いて見えるといつか聞いたことを思い出し、そんな空を描いたのです。ソ連やモンゴルに近い国境の町は、灼熱の太陽に満たされた乾燥地帯ですが、戦争に直面して訓練に明け暮れる兵隊にはきっと、希望の光を投げかけることはなかったでしょう。アリの目に映る青の太陽が、作者には、オアシスのように想像されたに違いありません。

（首席学芸員 小泉淳一）

没後30年

香月泰男展 —〈私の〉シベリア、そして〈私の〉地球—

2004年7月27日[火] ~ 9月12日[日]

茨城県近代美術館

香月泰男 『青の太陽』

昭和44（1969）年／油彩・麻布
162.1×111.6cm
山口県立美術館蔵

Contents

- 1 香月泰男展
- 2 ご挨拶
企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 美に遊ぶ
- 5 春の美術鑑賞旅行
- 6 探訪／香取 徳先生を訪ねて
- 7 所蔵作品から
- 8 会長挨拶
代議委員会報告
事務局異動
あとがき

游美

Yubi
No. 48



岐阜県美術館の全面的な協力により、そのコレクションから日本近・現代における絵画名品の数々、日本画・洋画各50点合計100点を一堂に紹介します。

岐阜県は、日本のほぼ中央に位置し、その地理的条件から、必然的に日本の東西文化両方の影響を受けつつ数多くの美術家を輩出してきました。コレクションの中核をなすそれら岐阜県出身の作家たちに加えて、近代日本美術史上に重要な足跡を残した作家たちの作品を併せて紹介します。これらの多種多様な選りすぐりの名品の数々により、名画の魅力を十分に堪能し、楽しんでいただけるものと思われます。

『深林宿雪』は、川合玉堂63歳、心技共に最も充実した時期の作品です。凜とした静寂のなか、残雪多き冬枯れの山中に炭焼き小屋らしき建物、そこでひとり働く男、そして一筋の立ち上る煙、それらが自然の厳しさの中にもほのかな温もりを感じさせます。

極力色彩をおさえ、写実の技を遺憾なく発揮し描かれたこの作品は、まさに他の追随を許さぬ玉堂の代表作といえるでしょう。(首席学芸主事 堀江俊夫)

川合玉堂 『深林宿雪』

昭和11(1936)年／絹本・着色
102.0×147.5cm／岐阜県美術館蔵

Contents

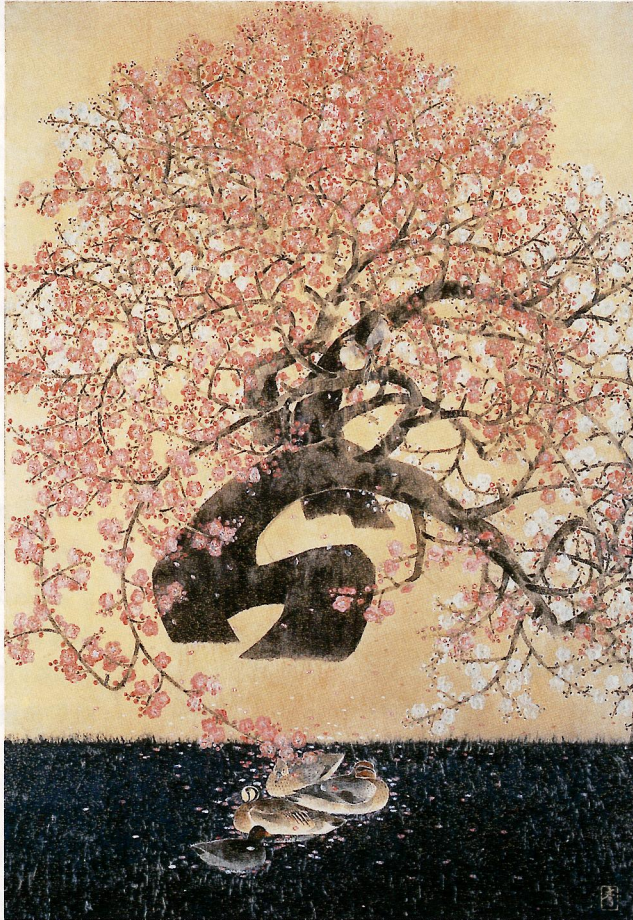
- 1 岐阜県美術館所蔵名品展
- 2・3 母 原田睦を語る
- 4 探訪／大塚義成先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 わが街のモニュメント
あとがき

岐阜県美術館 名品100選

2004年12月4日[土]～2005年1月16日[日]

游美

Yubi
No. 49



前田青邨 『水辺春暖』

昭和48(1973)年／紙本・着色・額装
176.5×122.0cm／大松美術館蔵

大正から昭和にかけて日本美術院の中心となって活躍した前田青邨は、『洞窟の頼朝』（昭和4年・大倉集古館蔵）など歴史画家として知られているが、花鳥画にも秀でており、特に梅を描いた作品には優品が多い。

垂らし込みの技法を使った幹は大きく円を描き、さらに枝が小さく円を描くことで、動きのあるリズムカルな構図となっており、そこに紅白の梅が満開に咲くことで絢爛な雰囲気漂わせている。円を描いた枝の先には水際と水鳥が描かれるとともに、下辺5分の一を占める濃紺の水面が明るい画面を下から支えて安定感を生み出すなど、青邨の構図の妙技が遺憾なく発揮されている。青邨は俵屋宗達に傾倒しているが、無背景による平面的な構成、垂らし込みの技法や装飾的な画面など琳派の影響が多うかがえる。

（副主任学芸員 中田智則）

華麗なる梅花の表現展

2005年2月19日[土]～3月21日[月・振]

Contents

- 1 華麗なる梅花の表現展
- 2・3 秋の美術鑑賞旅行
- 4 探訪／福田謙二郎先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 わが街のモニュメント
あとがき

游美

Yubi
No. 50



安井曾太郎
『金蓉』

昭和9(1934)年/油彩・カンヴァス
96.5×74.5cm/第21回二科展(1934)
東京国立近代美術館蔵

昭和期、戦前戦後にわたって洋画壇に一時代を築き、「日本の洋画」の指標とも見なされた安井曾太郎（1888－1955）。その評価を決定づけた代表作のひとつ『金蓉』は、かつて記念切手になったこともある、とりわけ有名な作品のひとつです。モデルの女性はいつも中国服を身にまとい、中国風の愛称で「金蓉さん」と呼ばれていました。

画家はこの服の色が気に入って、何度も塗り重ねたそうですが、完成直後から衣服に亀裂が表れていました。一度は所有者に請われて塗り直したのですが、すぐにまた亀裂が入ってしまったのだといいます。

しかし本展の直前に、『金蓉』は画面の修復を受けました。亀裂のない、完成直後に近い姿の『金蓉』は、画集などにはもちろん載っていないものです。新聞、雑誌で絶賛された当時のように蘇った、鮮やかな青いチャイナドレス姿を、是非会場でご覧ください。

(学芸員 井野功一)

Contents

- 1 安井曾太郎展
- 2・3 游美50号に寄せて
企画展紹介
- 4 企画展紹介
美に遊ぶ
- 5 探訪／能島征二先生を訪ねて
- 6 所蔵作品から
- 7 美術鑑賞旅行
- 8 わが街のモニュメント
友の会からのお知らせ
あとがき

歿後50年 安井曾太郎展

2005年6月11日[土]～7月24日[日]